

令和7年度第1回 唐津市総合教育会議 結果概要

1 日時

令和7年8月28日（木） 16:00～17:10

2 場所

唐津市役所 本庁舎3階 災害対策本部室

3 出席者

峰市長、栗原教育長、篠原教育委員、宮崎教育委員、石山教育委員、佐伯教育委員

4 事務局

〔総合政策部〕草野部長、石橋副部長（企画政策課長）、松尾行政マネジメント課長、増野係長、古賀係長、青木副主査、脇山副主査

〔教育委員会事務局〕中山部長、牟田副部長（教育総務課長）、森教育施設課長、松竹学校教育課長、島松学校支援課長、伊藤学校給食課長、岩尾生涯学習文化財課長、岡田近代図書館長、山崎係長、小浦主査

5 議題

今後のひとづくりと公民館について

6 概要

今後のひとづくりと公民館について、教育委員会事務局より説明を行った。

意見等は次のとおり。

（峰市長）

公民館の役割というのは地域にとって大きな位置付けになっていると思う。その中で Well-being を学びでありコミュニティの醸成などで実現できる場ということで、公民館のあり方を新しく見直していくという話をしているところである。文部科学省のほうからもある程度幅広い考え方をもってよいということで見直しも行われている。ひとづくり計画を策定し 11 項目にわたって様々

な施策を展開しているが、今回とらえたのは二十歳の祝典である。地域性を重んじて現在行っているところであり、一生に1回の祝典なので、できる限り市長としてもお祝いのメッセージを送りたいということで取り組んでいるところであるが、推計では令和13年を最後に二十歳の人口は1000人を下回ると見込まれている。これを目途にやり方を検討する必要があると思っているところ。

社会教育団体の活動については地域により温度差があるのも否めないところであり、一生懸命活動していただいている方々には予算の配分も考えていく必要がある。ぜひ地域力を生かした社会教育で子どもたちにとって実りある教育につなげていきたいと思っており、ひいては人づくりに繋がっていくものにとらえているところである。

今後の公民館のあり方について、公民館の位置付けを踏まえ今後の展開をしっかりとやっていきたいと思っており、市民センター機能はその中に入れ込むような形を検討しているところである。

(篠原委員)

以前、社会教育主事の資格を取るために長期の研修を受けた。日本には社会教育の拠点が1万箇所以上あり、これほど社会教育施設が整っている国は、世界的に見ても少ない。社会教育団体を支える人が高齢化でやめられ次が続いていない現状の中で、地域コミュニティが非常に薄れてきていることを踏まえると、地域の核である公民館は、ただ社会教育施設の看板だけではなく、もっと広げて地域コミュニティの拠点になるような繋がりを広げられるような施設として残していただけたらと思っている。

(宮崎委員)

浜玉公民館は既に市民センターと一緒にっており、よく出入りさせてもらう中で、赤ちゃんからお年寄りまでたくさんの人が利用されているのを実感する。館長さんの尽力もあるが、講座も大変充実され、多くの方が受講され活性化している。公民館の役割としては成功しているパターンであると思う。ただ、

今後どのように変わっていくのか心配でもある。公民館を活用した人づくりということで、今後官民協働による人づくりの輪を広げるという部分で行政的に何か展開があるのか。

(峰市長)

今後、10年20年先を見据えたときに人口動態は東高西南低という流れになっていく中で、地域コミュニティを守るとなったときは公民館が核になっていく。公民館が人づくりの拠点として発展すれば地域コミュニティの存続に繋がってくる。地域の方のご理解をいただきながら公民館を核として官民協働による人づくりの輪を広げていきたい。

(教育委員会事務局)

社会教育団体は行政の補完的な役割以上のことを担っていただいているが、どんどん減ってきている状況。あくまで任意団体なので行政からやってくださいという種類のものではない。地域によってたくさんやられているところと、そこまでやられていないところがある。行政の考え方而言えば、どこも等しくというのが前提としてあるが、より頑張っているところに重点的に支援をして、それを見た周りの方へ波及させていくような形にしていく必要があると思っている。

(栗原教育長)

この公民館のあり方や社会教育団体の存続というのを、地域や皆さんへの支援のあり方を検討していく中で一番大切なことは、少しでも多くその組織が存続し活動が継続されていくような形を見つめなくてはいけない。学校教育も社会教育の団体や地域に大変支えられており、その中で、どうやって唐津が大好きな子どもを育てるかということを、非常に重要なポイントにしている。その大きな道筋は、地域の方との繋がりで形作ろうとしているので、この公民館のあり方を検討する段階で、どう存続していただくか、どうすれば活動しやす

いか、そこが大きなテーマになると感じている。

(総合政策部)

人づくりというのは教育だけの範疇にはとどまらなくなっており、いわゆる地域活動というものを総合的に考えなければならない状況になっている。これまでは学校教育と社会教育の学社融合という言い方をされていたが、今は農家の方が先生になって体験活動をやってくれるなど、子どもから大人までみんなが集まる施設というのが今後地域を存続させるための施設になってくると執行部としては思っている。文部科学省の方で制度整理がなされたのも、人材的な部分も減ってきており、教育のカテゴリーだけでは話がとどまらなくなっているということがある。各産業面で活躍している方々が、地域に入っただけの仕組みづくりを、今後教育委員会等ともあわせてしっかり考えていく。先ほど宮崎委員から浜玉は様々な人が来ているというご意見があったが、まさしくそれが今からの公民館のあり方の実例になると思っている。

(佐伯委員)

一般の市民から見ると管轄の違いはわからない。公民館を充実させる、市民センターと一緒にっていくという話があったが、それはまた管轄が違うということになるのか。

(総合政策部)

施設を利用する中で、公民館という名前だけを取ってしまうと、どうしても教育上の制約が出て、使用に関して制限が出てしまう。ところがコミュニティセンターというような形で、一部分公民館の機能も有しつつ、例えば子どもたちが来て勉強できるような、みんなが集える施設といった機能を持たせていくことがこれから大事になってくると思っている。片や、地域が団体運営に係る活動資金を得るための催物ができるかどうかというところにも関わりが出てくるので、今後の施設の考え方としては、そういう部分も視野に入れた上で、総

合的な地域の拠点になる施設というものを考えているところである。

(佐伯委員)

例えば、花火大会などのイベントがあるときなど、この分野は市民センターに行って、この分野は公民館に行ってということがある。お互いが一緒に協働して、新たに垣根を越えて1つになるというのであれば非常に素晴らしいことと思う。

(石山委員)

公民館のあり方に関連して、市民センターの統廃合ということで、以前新聞記事にもなった呼子・鎮西市民センター統合の方針はどうなったのか。

(峰市長)

当時はそういう形でいこうと考えていたが、議会側から意見をいただいたところである。公民館も完成し、二十歳の祝典も一緒にやっている呼子・鎮西地区は、市民センターも統合するという方向性もあったが、少し強引過ぎるところもあった。例えば、朝市通り周辺に住まれている方は高齢化しており、高台まで行く手段をどうするのかという課題がある。今は呼子子供の家が地域の高齢者の方々のよりどころになっており、公民館のようなコミュニティの場は大事である。統合の話よりも、公民館を主体として、そこに市民センターの機能を持たせていただくことによって、地域の方々のコミュニティを守っていく方向に今舵を切らせていただいている。この見直しについてはしっかりと議会にも諮りながら今後のあり方を考えていかなければならない。

(石山委員)

説明を聞いて、公民館と市民センターが一緒になっていくメリットはとても大きいと思う。呼子に関しては、呼子公民館を立派に新しく建てていただいたが、市民センターに関しては今の場所にある意味があるのではないかと思う。

離島航路もあり、島の方も利用される。呼子市民センターは生活する上で、重要な行政と繋がる施設なのではないかと思う。統合の話もわかるが、呼子に関しては特別ではないかと考えている。

(峰市長)

昔の境界を越えて、エリア毎の機能的な枠で今後はまちづくりや人づくりをやっていく方向性であるということをご認識いただければと思う。

以下余白